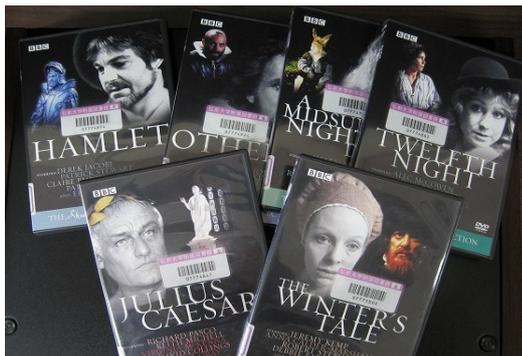


グザンダー版を採用、衣装や舞台背景なども可能な限りその時代の雰囲気伝えるものを使っています。『BBCシェイクスピア全集』は、1980年から87年まで、『NHKシェイクスピア劇場』として日本でも放送されましたので、ご記憶の方も多いのではないかと思います。このころはビデオ（ベーターとVHS）が出始めた頃で、筆者の身近にも、『NHKシェイクスピア劇場』を記録するためにビデオを購入したという人が何人もいまし



(左上から)『ハムレット』『オセロー』『夏の夜の夢』『十二夜』『ジュリアス・シーザー』『冬物語』

た。それから約20年後、わたしたちは、今度はDVDの形で、『BBCシェイクスピア全集』を観ることができるようになりました。シェイクスピア劇がわずか4分間の映画で表現された時から一世紀以上の歳月が流れ、その間映像技術は飛躍的な進歩を遂げ、DVDでは、日本語字幕(坪内逍遙の後、最初にシェイクスピア全集の日本語訳を完成させた、東京大学名誉教授小田島雄志氏が監修)、英語字幕の選択もできます。最新のデジタル・リマスタリングによるきわめて質の高い映像と音がわれわれを迎えてくれます。この画期的な『BBCシェイクスピア全集』が、弘前大学附属図書館で観られるようになりました。講義や講演のためであれば、一定期間貸し出しもしてくれます。『ハムレット』、『オセロー』、『夏の夜の夢』、『十二夜』、『ジュリアス・シーザー』、『冬物語』等、シェイクスピア劇の傑作を、ぜひお楽しみいただきたいと思います。

(たなか かずたか)

田中先生にご紹介いただいた「BBC シェイクスピア全集」は本館3階視聴覚室で利用できます。

Library News

医学部分館貴重資料書庫「松木文庫」移転



松木文庫入口

弘前大学医学部名誉教授松木明知氏から寄贈された、ウィリアム・オスラーコレクション、医学古典叢書の復刻版、レオナルド・ダ・ヴィンチコレクション及びノーベル医学・生理学賞関連コレクションを中心とする、医学分野の貴重資料を所蔵する医学部分館貴重資料書庫「松木文庫」が、医学部臨床研究棟地下一階に移転しました。

新しい「松木文庫」には貴重資料を保存する書棚を始め、資料を公開展示するためのガラスケース、監視カメラや空調設備が整えられ、隣接する「機器展示室」と併せて医学関連の歴史的資料の保存及び情報発信の拠点としての役割が期待されます。

また、今回の移転に併せまして、来る6月29日(火)に、開設記念セミナー及び所蔵資料寄贈者である松木明知氏による講演会が行われる予定です。

(医学情報グループ 藤井真嗣)



ウィリアム・オスラーコレクション

入退館システムの紹介

平成22年3月にリニューアルした入退館システムについて、紹介します。

以前の入退館システムは平成11年3月に導入されたもので、老朽化のため様々な不具合が出てきていました。不具合の主なものは、入館ゲートの読み取り不良やロック解除の反応遅れ、退館ゲートの人感センサーの反応ミス、管理用パソコンのフリーズ等です。

今回やっと予算要求が認められ、新しい機器を入れることができました。退館ゲートについては、過去にゲートの開閉音がうるさいという苦情が来たことがあり、また、人が通っても感知しないことが多々ありましたので、今回自動から手動に変更しました。入館ゲートの方は手動から自動になりましたが、開閉音はそれほど大きくないので、総合すれば以前より静かになったと思います。

ゲートにはそれぞれ役割があります。入館ゲートの方は、利用証のバーコードを読み取り、利用登録済の方かどうかを判定しています。このデータはパソコンに蓄積され、入館統計を作成するのに使われます。退館ゲートの方は、図書の無断持ち出しを防止する機能があります。正規の貸出手続きをしていない図書をバッグ等に入れて出ようとすると、ブザーが鳴り、ゲートがロックされるようになっています。

新しくなったシステムにより、より快適に図書館をご利用いただけることを願っています。

(情報サービスグループ係長 齋藤香織)



新しい入退館ゲート

職員研修を実施

附属図書館では、夏季と冬季の2回、利用者サービスと職員のスキルアップを目的に職員研修を実施しています。

平成21年度の2回目の職員研修を2月26日に実施しました。今回の研修では、人文学部の嶋恵一准教授に



職員研修の様子

講師をお引き受けいただき、米国ミシガン大学に在学研究員として長期滞在された時に撮影されたスライドを使い、「アメリカ大学図書館の現状」と題した講演をしていただきました。講演では、ミシガン大学、テネシー大学マーティン校などの附属図書館の状況が紹介されました。吹き抜けのワンフロアーに300席以上の閲覧用平机が配置された開放的な閲覧スペースや飲食自由のアメニティスペースなどが紹介され、歴史文化の異なる米国の大学図書館とは言え、利用者サービスや将来の改修計画を考える上で大いに参考になる研修となりました。

(学術情報課長 酒井量基)